

「歯舞」がよめない「沖縄及び北方対策担当大臣」

フジワラ タダシ

2016年 2月 9日、島尻安伊子 沖縄及び北方対策担当大臣（当時）が 記者会見で「歯舞」がよめず、そばにいた秘書官が「はほまい」とつたえるというできごとがあった。職務が職務であるだけに、インターネットなどであざげられ、てきびしくたたかれた。わたしがおもうに、島尻氏はおそらく「普通のひと」なのであろう。

日本の、とりわけ北海道の、地名にはアイヌ語に由来するものがたくさんある。しかも、音にも訓にもぴったりとあわず、むりやり字をあてて難読になっているものがじつにおおい。「歯舞」はアイヌ語の「ハ・アブ・オマ・イ」で、「流氷が退くと小島がそこにある所」という意味だという（ウィキペディアによる）。「歯」とも「舞」ともまったく関係がない。意味に関係なく「はほまい」というおとに「歯舞」という字をあてたものであるから、「普通のひと」がこれをよめないとしてもさして不思議ではない。

問題はなんでも、無理をしてでも、漢字でかかなければ気がすまない日本の文化であろう。そして、もうひとつアイヌ文化への敬意の欠如をあげておかなければならない。

ヨーロッパの地名、たとえばベルリンを伯林、ロンドンを倫敦などと、中国文字（漢字）でかく意味はあるまい。実際、通常はカタカナがきをしている。であればアイヌ語の地名も中国文字（漢字）でかく必要はない。いや、そうしてはいけない。アイヌ語のオタ・オル・ナイを小樽（おたる）、ピパ・オ・イを美唄（びばい）などとかいて原語=アイヌ語のおとをそこない、漢字のもつイメージをつけくわえてしまった。こういうことをしてはいけない。いまからでもカナがきにあらためるべきである。

あて字の難読地名がよめないことよりも、あて字をつかうことのわざわざい気がつかない、気がついてあらためようとしないうことの方がよほどはずかしいことではあるまいか。